

# 増産・省力・品質向上を軸に

## 米づくりの課題とその成果



冷害克服のためにも保護苗代が奨励されている

新しい「稲づくり運動」は、増産・省力・品質向上の三つの目標をかかげてすすめられることになった。明日の増産につながる米づくり名人の語る「稲作への課題」。あわせて41年度朝日農業賞にかがやく金浦農協、多収穫日本一の渡辺さんの営農設計にふれてみた。

「東北開発の新しい方向と具体的な施策」と題する、東北七県知事会がまとめた「提言」は、東北開発のあり方、もって行き方に大きな波紋を巻き起している。これには三本の柱がたてられており、その筆頭に、日本の食糧供給基地としての位置づけを具体的施策をもって確立すること、が提言されている。

簡単にいうと、国の食糧基地としての機能を分担するから、そのかわりこれまでのまったく平均的な国の農業政策にアクトメントをつけ、食糧供給基地の役割りを果しうるだけの超重点的な農業投資をしてほしいというのが第一の主張である。時を同じくして、昨年末に本県の第二次総合開発計画がまとめられ「産業の調和ある発展」の中で、農業の近代化が次のようにおりこまれた。

本県の農業は、約十五万畧の耕地と十  
二万戸の農家をようし、農業所得は総生  
産所得の二二割を占めている。しかも過  
去十年、米を主軸として畜産・野菜・果  
実の大巾な増大により農業生産指針で五  
〇割の上昇を示している。

耕地のなかで水田の占める割合は全国  
最高で、それだけ米の地位はきわめて高  
い。しかも県内には開発をまつ未利用地  
が多く、単位面積当り収量でも全国的に  
上位にある。

米作については品種の改良をいっそう  
促進するとともに、かんがい排水を中心  
とした土地改良、新技術の開発普及によ  
って生産力の向上をはかろうとするもの  
である。と、本県農業の昭和四十五年ま  
での未来像をえがいている。

## 実践主体を部落において

昭和三十八年。長雨につづいていもち  
の大発生、集中豪雨、冷害と、米にして  
十万吨、被害額八十四億九千万円にのぼ

る打撃をこうむった。

このため三十九年一月「健康な稲作り  
運動」を提唱し、県民あげてこの運動を